

シリーズ **5** その **市陸協を支えてくれる方々**

長野市営陸上競技場 スタッフ



長野市営陸上競技場 スタッフ 坂本侑史

長野市営陸上競技場のスタッフの皆様方には、1年を通じて大変お世話になっております。私達にとりましては競技会、また指導する先生方にとりましては競技場の使用。いずれにしても気持ち良く使わせて頂いていることが、大変有難く思います。スタッフの方々の心温かい対応が、選手達にとりましては、親しみやすく、スタッフの方々に声を掛けている場面をよく見かけます。大変嬉しいことです。これからもお世話になりますが、よろしくお願ひ申し上げます。

陸上競技場、ご利用いただき、誠にありがとうございます。皆様方には『気持ち良く使用して、気持ち良く利用いただく』ことをモットーに、競技場施設面の不具合の無きことを心掛けております。

教室、強化練習、日々の部活動、年間を通じての大会行事等、指導者の先生方、コーチ、長野市陸協役員の方々には一方ならぬお世話をいただき、心より感謝申し上げます。学生さん達にとって、良き指導者の元で強靱な精神面と粘りのある忍耐力、人生

形成の上にも、大いに役立っていることと思います。この競技場から優秀なアスリート達が活躍しておりますことは、本当に指導の賜と思ひます。今まで以上の相互のモチベーションの高揚を図って、利用者が使い易い競技場を目指して、管理に務めて行きたいと思っております。

ますますのご指導とご鞭撻を宜しくお願ひ申し上げますとともに、指導者の先生方、陸協の皆様のご活躍とご発展を心よりお祈り申し上げます。

編 集 後 記

平成20年11月17日(月)の信毎スポーツ欄は、にぎやか。11月16日、飯田合同庁舎にゴールした県縦断駅伝51年ぶり飯田下伊那Vの号外を長い行列に並んで頂いた。歯を食いしばって両手高々とガッツポーズでアンカーの三沢健選手、テープを切る。関係者の笑顔や集合写真撮影にテンヤワンヤでした。庁舎前は選手等悲喜こもごもの姿である。

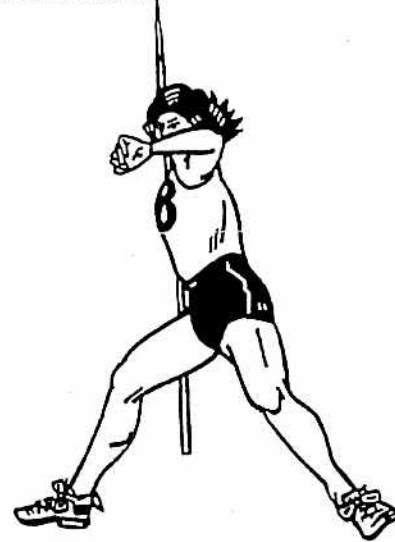
さて、話は別だが、平成20年10月26日、青梅陸協 前の会長、中大の先輩でもある久保田克彦様の葬儀、友人からの電話で知る。早速、お悔やみ、うるし電報「菊」。心から気を使って文を考えて電話電報を打った。当日の夜、昔の木崎正子(藤本)氏、彼女は東京オリンピック女子800Mの選手で中大の同級生である。その彼女からの電話によ

ると一番前に日本陸連の河野洋平会長、そして青木半治様等、多くの皆様列席の中、第1回青梅マラソン優勝者、若松軍蔵の弔電を事もあらずに一番最初に読み上げて頂いたそうである。葬儀には出席できなかったが、その話を聞いて、ラッキョーみたいな涙が出てきた。それこそ一世一代の感謝感激の極みです。青梅報知マラソンは昭和42年、東京五輪マラソン3位の円谷幸吉選手と走ろうとのキャッチフレーズで開催された。第1回大会には337人が出場、優勝は私、若松軍蔵、1時間36分14秒、2位は円谷さん、1時間37分50秒だった。

今回もまた、原稿等にご協力を頂き、誠にありがとうございます。

平成20年12月
広報部長 若松軍蔵

SHINANO MATE
SENSITIVE BRAND



ATHLETIC UNIFORM

しなのメイト 株式会社

〒389-0606 埴科郡坂城町大字上五明992-2
PHONE (0268) 81-1336
FAX (0268) 81-1337



題字の「動き」は長野市陸協三代目会長 山浦保氏の書で、山浦会長の頃、市陸協会報紙として何号か発行されていました。

発行所 長野市陸上競技協会
発行人 浦野義忠
編集人 若松軍蔵

◆ 県縦断駅伝又多一ト地点盛り上げる ◆

長野市陸上競技協会 会長 伊藤利博

第57回長野県縦断駅伝競技大会も、飯田下伊那チームが51年振りに優勝を飾り、また新たな歴史に1ページを刻んだところでありますが、私は、57回も続くこの大会の歴史の重みを強く感じながら、この全県に渡る大きなイベントを、いかに盛り上げて行くかということに昨年より真剣に考えて来ました。第1回からたずさわって来られた私達の先人は、もうこの世にいない方が多いかも知れませんが、長野市陸協では、山浦保先生、田中秀雄さん、清水一郎さん、大日向佐一さん等の顔が思い浮かびます。この大会を立ち上げた先輩諸氏に改めて敬意と感謝を申し上げます。このように大きな大会に成長した県縦断駅伝を陸協サイドから、もっともっとバックアップして盛り上げて行くのが、私達の大きな責務でないかと思っています。沿道を守る支部陸協、地域、職場の方々にもご支援をいただき、長野県の大規模なイベントとして発展して行ってくれたら、こんな嬉しいことはありません。

そのようなことで、今回スタート地点を長野市陸協で盛り上げようと、多くの皆様方のご協力を得て実施することができました。スタート地点となる長野市には各チームの監督、選手達が集まりますので、歓迎の意を表すために、



温かいミルクの提供

桃太郎旗を作り、信毎本社前と第1中継所に立て、その場を大変賑やかな雰囲気を作り出すことができました。

また、遠来の監督、選手、関係者にスタート前、暖かい牛乳の提供ができないかと、長野県牛乳普及協会へ出向き、チーム用と温めて提供できる1リットル用を無償で提供していただき、ボランティアの方々のご協力を得て、関係者に飲んでいただくことができました。各チームへは、飴とバック用の牛乳の差し入れをして、大変喜んでいただけました。

第1走者が元気良くスタートが切れるように、若槻地区有志の皆様方をお願いしまして、「三登山太鼓」を演奏していただき、大変盛り上げることができました。

選手達のためには、あと2km、あと500mの看板を作り、最後のスパート目印にもなったことと思います。

長野市陸協として、このようなことを行い、少しでもスタートの盛り上がりには貢献できて良かったと思っております。今後更に、良い智恵をしぼって、来年以降につなげて行かなければと思っています。最後になりましたが、ご協力をいただいた皆様方に心より感謝を申し上げます。

第57回長野県縦断駅伝長野市チーム4位後退

第57回長野県縦断駅伝を終えて

長野市駅伝部 主将 前島 啓一

第57回長野県縦断駅伝を迎えるにあたり、今年の長野市チームの区間構成は1日目は前半多少の遅れは覚悟し後半勝負、2日目は16区までいかに後続を放し後半粘るか、というものでした。優勝争いをしそうなチームとの戦力分析をしていると、トータルの力の差はほとんどなく、わずかな取りこぼしが勝敗を大きく左右するな、という危機感の中、11月15日を迎えました。

1日目は6区までで5分差は覚悟していましたが、8分26秒という大差、また4区終了時点での5分繰り上げに間に合わず、後半選手に焦りが出ないか心配でしたが、少しずつ差を詰め、1日目としてはトップ全佐久とぎりぎりの2分48秒差まで詰めての3位でした。2位

上伊那とは53秒差、4位飯田下伊那とはわずか3秒差で、予想以上の僅差に、個人的には1日目に走り終わったにも拘らず、緊張感はずばかりでした。

2日目に入り、前半で飯田下伊那に離され、全佐久、上伊那にはなんとか逆転できたものの、差は僅かで、その僅かな貯金を最後まで持たせて欲しいと願うばかりでした。しかし結果は、力及ばず4位、28年振りにメダルなしという結果となりました。

各チーム、選手の体調不良などのアクシデントを、大会当日の変更で選手のやり繰りでカバーしています。その中、長野市は大きなアクシデントもなく今大会を迎え、ひとりの変更もなく臨みました。その結果が4位でした

ので、悔しいですが「力負け」という言葉が当てはまるのではないかと考えています。自分達の力を過信していたとは思っていませんが、上位3チームの粘り強さが今年の長野市に少し欠けていたように思えました。

苦しい時でもなんとか3位以内を確保してきた伝統を、「メダルなし」という結果を残してしまい、日頃から応援していただいている皆様、伝統を築いて来た諸先輩方に大変申し訳なく思っております。ただ、4位という結果の中にも今後に繋がるいい内容もありましたので、来年に向け、それをより大きな力に替えてV奪回を目指し練習をしていきます。

今後ともご支援、ご指導の程、よろしくお願致します。



最後の力を振りしほってゴールする宮澤葵選手

長野県縦断駅伝に出場して

広徳中学校 3年 佐々木 文華

11月15日に行なわれた長野県縦断駅伝の5区を走らせていただきました。昨年度は、自分の力を出すことができずに、とても悔しい思いをしました。今年は、絶対に長野市チームに貢献するという気持ちで、学校に行く前に上田まで試走に行き、イメージトレーニングをしました。

そして、駅伝当日、大人の方々が声をかけてくださり、サポートの人がいてくださったおかげで、リラックスして走ることができました。私は、繰り上げスタートでした。スタート前、4区の大久保さんがもうそこまで来られていたのですが、襷を継ぐことが出来ませんでした。

しかし、大久保さんが、全力を振り絞って襷を継ぐ姿を見て、絶対にあきらめないで走ろうと決め、強い気持ちでスタートすることができました。走っている時は、次の走者である小川さんが走りやすい位置で渡せるように、とそれだけを考えて走りました。5区は最後に急な登り坂がありましたが、監督さんが声をかけてくださり、切りかえて走ることができました。そして、区間賞をとることができました。

この駅伝では、大人の方々と襷を継ぐことができる貴重な体験をすることができました。これから、もっともっと強い選手になって、また長野市チームとして走れるように、練習を頑張っていきたいと思ひます。

県縦断駅伝競走長野市チームご支援に感謝

第57回長野県縦断駅伝競走大会において、右記の企業及び個人からご支援をいただきました。毎年ながら御礼申し上げます。

(敬称略 順不同)

- ㈱ホテル犀北館 モトヤスポーツ 中央館清水屋旅館
- ㈱車屋HIZUME ㈱スター商会 ㈱アイフ記章
- ㈱JTB中部 轟正満 伊藤利博 依田邦夫
- 山本晴雄 寺島大士 勝本勝彦 高橋恒和 白田昭次
- 柴澤英男 早川千吉郎 北原勲 村田修一 浦野義忠

国民体育大会での活躍

松代高校陸上競技部 太田 朗

高校生として今季最後の全国大会。悔しい思いをしたインターハイから2ヶ月間、入賞そして15mジャンプだけを考え、練習に励みました。2ヶ月の間には、辛い合宿も乗り越えました。腰の痛みや足首の痛みが完治しないまま大会当日を迎えることになりました。

競技会場に着くと、インターハイで戦った顔ぶればかりで、絶対に入賞しようという気持ちが強くなりました。

競技が始まり1本目は緊張のあまり14m17、2本目は何としても跳んでおきたいという気持ちが強すぎ体が突っ込んでしまったが、自己新となる14m76、これで少し気が楽になり3本目で14m88、決勝進出が決まり、4本目に14m92、そして6本目に今まで目標にしてきた15mジャンプができ、4位入賞を果たすことができました。

2日間を空け、2種目の入賞を狙い走幅跳に挑みました。トレーナーの方々の協力もあり、跳躍出来る状態まで体は回復していましたが、足が合わず、1本目、2本目がファール、追い詰められた状況の中、3本目に7m

10を跳び、決勝に進むことができました。決勝では、思うように記録が伸びず、7m02で11位でした。入賞することはできませんでしたが、全国のたくさんのライバルともう1度戦えることができてよかったです。

今回の大分国体に出場させていただき、僕自身4位になれるなんて思っていませんでしたが、指導して下さったコーチ、トレーナーの方の協力や、応援してくれた方々のおかげです。感謝したいです。また、入賞できたのもインターハイ後の合宿や演習を乗り越えることができたからだと思います。後輩達には目標をしっかり持ち、その目標を絶対に達成するんだという気持ちを常に持って1日1日の練習を大事にしてほしいと思います。



長野東高校 玉城 良二

長野東高校2年連続全国大会へ

多くの皆様のご支援をいただき、今年も生徒の目標であった「都大路」に出場できることとなり、心より感謝申し上げます。

初出場であった昨年は、出場することが目標でしたが、今年は初めて3学年が揃い、部員も12名とやっとチームらしくなってきました。そのような状況の中で、現3年生が「ゼロ」からスタートする時の目標が「8位入賞」でした。まさに今年はその目標へ



の挑戦をする大会となりました。

何も恵まれた環境があるわけではない公立高校の長野東高校ですが、大変幸せなことに私たちチームには日頃の活動を支えて下さる川中島地区の住民の皆様や、普段から励ましやご指導をいただける、長野市陸協、長野市駅伝部の皆様はじめ、多くの方々の温かな心という大きな財産があります。特に長野市陸協の伊藤会長、浦野理事長には学校までお越しいただいて激励を賜るなど、本当に感謝申し上げます。

12月21日に号砲の鳴る女子のレースは、記念大会で58チームの出場でレベルの高いレース展開が予想されますが、臆することなく、自分たちの力を出し切ることに全力を尽くして、感謝の気持ちと挑戦する気持ちを表現できるような駅伝を目指します。

第180回 ホープさん

長野吉田高校1年 田中美沙

私の今年の夏は、今までで一番充実し、たくさんの良い刺激を受けることができた、最高の夏となりました。中学でも目立った選手ではなかった私が、まさかインターハイという大舞台で走ることができてなんて夢にも思っていませんでした。それも高校に入学したばかりの時期に。これらは私が長野吉田高校に入学した時に決まっていた運命なのかもしれません。と言うのは、私自身、吉田高校の陸上班の一員として日々の練習で感じるのですが、吉田高校の練習の雰囲気は、練習とは思えないほど緊張感があるのです。きっとこの緊張感には班員一人一人の勝ちたいと思う気持ち、やる気、強くなりたいと思う気持ち、高い意識を持っているということから生まれているのでしょうか。私は、こんなに陸上と向き合い、向上心を強く持っている長野吉田高校陸上班の一員であるということに、喜び、誇りを感じています。きっとこの陸上班の一員になれたからこそインターハイという最高の舞台で走ることができたのです。

だからこそ私は、吉田高校陸上班のメンバーのた

めにも、時には厳しく時には優しく指導して下さる先生方のためにも、いつも大会に駆けつけてくれてどんなことがあっても私を応援し続けてくれる家族のためにも、そして自分のためにも、もっともっと強い選手になりたいと思ひます。

そして、何より走ることに楽しみや喜びを感じ続けることのできる選手を目指し、自分の掲げた大きな目標に向かって、これからも走り続けていきたいと思ひます。

<今年度の主な成績 文責：藤森 要>
長野県高校新人大会100m・200m・400m・400m
リレー・1600mリレー優勝(五冠王)自己ベスト
100m12秒58 200m25秒38 400m56秒88

